

‘φιλοσοφειν’ (Pl. Ap. 28E5) とは何をすることなのか

——田中美知太郎訳『弁明』を読む——⁽¹⁾

古 川 英 明

1. 初めに —— 哲学の起りについて

哲学は小アジア，イオーニア地方のギリシア植民市，ミーレートスにおいて Thalēs によって開始された，とするのが哲学史の通説である。教科書⁽²⁾には，

「小アジアのギリシア植民地，イオーニア地方に哲学が誕生したのは紀元前 6 世紀のことであるが，最初の哲学者タレス（前 624 頃－546 頃）は二等辺三角形の底角の等しさを証明し，また日食の予言をしたと言われている」

とある。

このような通説は，アリストテレス『形而上学』1 卷 3 章（983b20）における次の記事に拠ったものである。

「タレスは，あの知恵の愛求 [哲学] の始祖であるが，「水」がそれ [原理] であると言っている」⁽³⁾

しかし今日私たちの理解する意味での「哲学」は，ソクラテースとプラトーンの間⁽⁴⁾に生まれた。この「哲学」，すなわち，諸科学と区別された，狭義の哲学はソクラテースによって開始されたのであって，アリストテレスの言う「哲学」は，この狭義の哲学と諸科学を含む学問一般を表す総称であり，広義の哲学として理解されねばならないのである。

「この合成語 [“philosophia”] の意味は，…狭義において初めて，科学と区別される今日の意味での「哲学」を表わす。さらに，この「哲学」の意味での狭義の “philosophia” の用例が頻出するのは，プラトンの著作においてである。また，これらのプラトンの用例において，この語はとりわけソクラテースという人物の周辺をめぐっている。」⁽⁵⁾

「デルフォイの神は，ソクラテースよりも知恵のあるものはいない，と言った。しかるに，ソクラテースは，自分が知恵のある者などということは，ほんのわずかなりと身に覚えがない，と言う。神の証言とソクラテースの自証とのあいだの矛盾緊張から，ソクラテースの吟味の仕事が始まる。これをソクラテースは「哲学する philosophhein こと」と呼んだ⁽⁶⁾。」

「このように，狭義でのフィロソフィアの用法は，ソクラテースの生と死の真相を解き明かそうとするプラトンの営為のなかでもっとも厳密な形で示されえたのであるとすれば，狭義での哲学探究はプラトンのソクラテースへのかかわりのなかで，ソクラテースとプラトーンの間において生まれたと考えるのが正しい⁽⁷⁾。」

（狭義における）哲学はソクラテースの対話活動として誕生し，プラトーン作品のうちに結晶化し，その作品が継承されるとともに追思考されることで生きてきた。「哲学」

(φιλοσοφία) の歴史はこのように始まり、今日に到っている⁽⁸⁾。

2. 問題提起 —— 哲学の成立現場を的確に捉え、日本語に表現すること

加藤説に従うと、(今日の意味・狭義の) 哲学の成立はプラトーンの初期対話篇 (——いわゆる「ソクラテス対話篇」) のうちに確かめることができるはずである。ここでは初期対話篇の一つである『ソクラテスの弁明』(——以下、『弁明』と略す) を取り上げ、哲学がどのようにして成立してきたかを、そのうちに追跡することにしよう。この課題を遂行するために私たちは、『弁明』に登場する ‘φιλοσοφείν’ の意味を究明するという道を取ることにしよう。意味の究明の後には、これをどのように日本語に移すのがよいのかを考えてみよう⁽⁹⁾。言うまでもないが、『弁明』は学術論文ではない⁽¹⁰⁾。プラトーンは哲学研究者や専門的学者を、ましてや今日の日本の哲学学習者を読者に想定して『弁明』を著述したのでは全くない。そうではなく、彼の同時代のアテナイ市民に対して師ソクラテスのために弁明したのである。むろんのこと、ソクラテスも法廷の裁判官 (δικασταί, ——籤によって選ばれた普通のアテナイ市民) に対して弁明しているのであり、しかもその言葉や表情を裁判官は聞いたり見たりしているのである⁽¹¹⁾。だから、今日の読者に対して、それがもつ (概念的) 意味内容を、つまりは哲学説を伝えるための日本語訳を作るのは適正であるとは思えない。『弁明』公刊当時⁽¹²⁾のアテナイ市民が読んだとおりに、あるいは、その朗読されるのを聞いた⁽¹³⁾とおりに、——そしてソクラテスも概ね『弁明』が伝えるとおりに語ったであろう⁽¹⁴⁾、——その言葉が語られたとおりに、また聞かれたとおりに、日本語に移さなければならない、と思うのである⁽¹⁵⁾。

‘φιλοσοφείν’ の二義 **popular sense** と **philosophical sense**

「哲学」という言葉は英語の ‘philosophy’ の訳語として明治初年、西周によって考案された⁽¹⁶⁾。これはもとから在った日本語ではない。そして英語の ‘philosophy’ はラテン語の ‘philosophia’ を、さらにラテン語の ‘philosophia’ はギリシア語の ‘φιλοσοφία’ をそれぞれ音写したものである。音写したのは (ギリシア以外の) いずれの国においても ‘φιλοσοφείν’ に相応する知的営みが存在しなかったからである。したがって「哲学」が何であるかは φιλοσοφία が何であるかを尋ねることで解明されてくるであろう⁽¹⁷⁾。

しかしこれは、プラトーンの周辺で造られた言葉であるかも知れない⁽¹⁸⁾。そこでその同族語である動詞形、形容詞形について言うと、ギリシア語の ‘φιλοσοφείν’ は (人工語ではなく、) 自然な言葉として一般に流通していた。‘φιλόσοφος’ (形容詞) も、後で取り上げるが、たとえば ‘φιλότητος’, ‘φιλοχρήματος’ などと並ぶ普通の言葉であった⁽¹⁹⁾。辞典には他にも ‘φιλογυμναστικός’, ‘φιλοκύων’, ‘φίλωνος’ など、‘φιλο-’ という形の語がたくさん載っている。動詞 ‘φιλοσοφείν’, 形容詞 ‘φιλόσοφος’ の用例はソクラテスが生きた前五世紀に少数見出

され⁽²⁰⁾、これが、もともと有していた意味の他に、ソークラテースにおいて「(狭義の) 哲学」という意味をも持つようになった。前者を ‘φιλοσοφείν’ ないし ‘φιλόσοφος’ の popular sense (民衆の意味)、後者を philosophical sense (哲学的意味) と呼ぶことにしよう⁽²¹⁾。そうすると、名詞 ‘φιλοσοφία’ には popular sense は無く、ただ philosophical sense だけがあると言えそうである。

A. ‘φιλοσοφείν’ の二義、または「中傷」が生じたことについて

A.-I 23C-D

ソークラテースは西暦紀元前 399 年春、神々に対する不敬 (ἀσέβεια) と青年を腐敗墮落させている (διαφθείρειν) との二つの廉で告発された。『弁明』は、この告発 (理由) に対するソークラテースの弁明を記したものである。彼は自らの「哲学」(‘φιλοσοφείν’。以下ではこれをまた ϕ_{ph} と表示する) の実践について「真実のすべて」(17B8⁽²²⁾) を裁判官 (δικασταί) に説明するが、もとより彼らの理解するところではなかった。すでに「多年にわたって」⁽²³⁾ (18B2) 大多数のアテーナイ市民は彼をソフィステース (σοφιστής) と誤解していたのである。

彼はこの古くからの誤解を告訴状 (「宣誓口述書」(ἀντωμοσία)) に仕立てている。告訴状に曰く、

「ソークラテースは有罪である…、天上地下のことを探求し、また、弱論を強弁し、また、この同じことを他人に教えている (διδάσκων) という理由によって」(19B-C) …… [1]

彼は、人びとが自分をこのように誤解し、あるいは誤解であることを知りつつ「中傷」するのは何故なのか、その理由を説き明かそうとする。メレートスらはそのような誤解ないし中傷を「信じる」、というよりはむしろ、それに乗じることで、「このたびの公訴」(19B2) を提起しているからである。

彼はこの説明のおわりで、つまり、メレートスへの尋問⁽²⁴⁾を開始するすぐ前のところ (23C-D) で、次のように述べている。

——若者たちが自分の真似をして人びとを「吟味する」(ἐξετάζειν) ということをするようになった。無知を暴露された人びとは、ソークラテースは若者を腐敗墮落させていると言うようになった。しかし、それは何をし何を教えて (ὅ τι ποιῶν καὶ ὅ τι διδάσκων) なのかと尋ねられると、彼らは返事に窮し、

「φιλοσοφείν している者についてすぐに言われるような、例の『空中や地下のこと』とか、『神々を認めない』とか、『弱論を強弁する』とかいうこと」をソークラテースは行い、また、それを教えて若者たちを腐敗墮落させている」…… [2]

と答えた。

ソークラテースはさらに、彼らは「本当のこと (τὰ … ἀληθῆ) を言いたくなかった」(23D8,

cf. 18B2) から、上のように返事したのだらうとも付け加えている。

ソクラテースは「本当」は「何をし」ていたのか、それに対して世間の人びとは、ソクラテースは（それとは別の）「何をし何を教えて」いると誤解ないし中傷したのか。

ソクラテースや彼を真似た若者は、「人間的にして市民的(ἀνθρώπινόν τε καὶ πολιτικόν)」(20B5)な「善美(καλὸν καὶ ἀγαθόν)」(21D4)、——「善美」を言い換えて——「徳(ἀρετή)」(20B2, 5)とは何かと、人びとに問うたのであろう。人びとは返答できなかった。しかし彼らは「本当のことを言いたくなかった」から、偽りの返答をした、とソクラテースは言っているであろう。では、その偽りとは何か。ソクラテースは若者に自然学と弁論術(ῥητορικὴ)を教授した、——自然学を教授する中では無神論的思想をも鼓吹した(cf. 18C3)、——というのが、それである。それはソクラテースによれば、「φιλοσοφεῖνする者」たちを非難するときに「すぐに言われる」「常套的」(πρόχειρα, 23D5)な言葉であった。

これがソクラテースに対する誤解ないし中傷が生じ来たった筋道である。それでは‘φιλοσοφούντων’(23D5)はいかなる意味の言葉であろうか。中傷は「古くからの訴人」の「宣誓口述書」では次のようなものであった(再掲)。

「ソクラテースは、天上地下のことを探求し、また、弱論を強弁し、また、この同じことを他人に教えている」(19B-C)

この中傷に対して、自然研究も「人間教育」⁽²⁵⁾も行っていないと彼は弁明するのだが、後者について、ゴルギアースやプロディコスやヒッピアースにはそれが出来るのだとも述べている(19E)。彼らはいずれも名高いソフィステースである。ソフィステースにもっとも求められたのは弁論術であったが、彼らはそれ以外にも種々の学問を教授した。ソクラテースに名指されたヒッピアースは博識家であった。プラトーンの『プロタゴラス』には、大ソフィステースであるプロタゴラスが、

「彼ら[自分以外のソフィステース]ときたら、…やれ算術だ、天文学だ、幾何学だ、音楽だと教えこんで、…[青年たちを]専門的な学術(τέχνας)の中にはうりこむ」と言いながら、

「ヒッピアースのほうをじろりと見た」

と述べられている(藤沢令夫訳『プロタゴラス』(岩波文庫) 318D-E)。

前者、自然学者としては、メレトスへの反論の中でアナクサゴラスの名前が挙がっている(26D)。ソクラテースに名指されたこれらの人びとが‘φιλοσοφεῖνする者’という言葉で彼や彼の弁明を聴く者たち(裁判官と傍聴者)によって考えられていたのだらう。自然研究も、現代の自然科学と異なって、実験観察よりも議論にわたるところが大きかったから、——人びとは太陽をもって真っ赤に燃える石とするアナクサゴラス説をただの奇妙な議論としか受け取らなかったであろう、——当時の人の目には弱論強弁(詭弁)としか映らなかったのではあるまいか⁽²⁶⁾。そこで自然学もソフィステースの教授する学問に含めると、ソクラテースはソフィステースと誤解され、また中傷されたということ、そして彼が説明の最

後、23Dで‘φιλοσοφείν する者’と言ったとき、それは多くの「専門的学術」(Prt. 318E1, 2)を教授する‘σοφιστής’ (20A5) たちを指す言葉であったと思われる。

以上の考察は、23Dにおける「中傷」(23E3. cf.18D3, 19B1, 3)の抛って来る原因の説明が「宣誓口述書」に仕立てられた「中傷」(19B4-C1)を説明するものであるとの、つまり[2](73頁)は[1](73頁)の言い換えであるとの仮設に立って行なわれたものである。この仮設が正しいとすれば‘φιλοσοφείν’(23D5:‘φιλοσοφούντων’)は広く「学問すること」一般を意味する語であり、‘φιλοσοφῶν’(「φιλοσοφείν する者」=‘φιλόσοφος’)は‘σοφιστής’と同義であって、「学者」を意味している。したがってそれは、狭義における、今日の意味での「哲学」ではなく、「学問一般」という意味での広義の「哲学」を意味している。それはソクラテース以前から存している、民衆の意味(popular sense)での‘フィロソフエイン’である。私たちはこれを「ph_{po}」と表示し、「ph_{ph}」から区別することにする。(「ph_{ph}」はソクラテース・プラトーンにおいて成立したフィロソフエイン、狭義の今日の意味におけるフィロソフエイン、言い換えると、哲学的意味(philosophical sense)におけるフィロソフエインを表示している。)

私たちのこれまでの考察は、田中美知太郎の解釈を支持している。田中訳は「学問をしている者」となっているからである。

それならばフィロソフエインの哲学的意味、すなわち ph_{ph}は『弁明』のうちに見出されるであろうか。言い換えると、(狭義の)哲学の成立を確かめることができるだろうか。田中訳に従えば、「然り」と答えなければならないだろう。28Eでソクラテースは言う、「わたし自身でも、他の人でも、誰でもよくしらべて(ἐξετάζοντος)、知を愛し求めながら、生きて行かなければならない」(田中美知太郎訳)と。「知を愛し求めながら」は‘φιλοσοφούντα’の訳語である。つまり28Eの‘φιλοσοφείν’は「知の愛求」と訳されている。先には「学問をしている」(ph_{po})と訳された。訳語が変更されている以上、それがいかなる意味・内実を有するかはともかく、‘φιλοσοφείν’(28E)は別の意味を有すると見られているに違いない。もともとこれはあまりにも形式的な理解の仕方であって、私たちは加藤説に従ってこの論考を出発させたのだから(cf. 本稿71頁)、当然、哲学の成立は確認できなければならないのである。田中もまた、それが ph_{ph}を表わす言葉であることを示したいがために「知の愛求」という訳語を選んだのではないだろうか。

そこで、これまでに見てきたところから、つまり、[1]と[2]から、ph_{ph}がいかなるものとして示唆されているかを考察してみよう。

まず、[2]から、ソクラテースはアテーナイ市民を相手に人間的・市民的な「善美」=「徳」について問答したということ、そしてこの自らの問答活動を「フィロソフエイン_{po}」(ph_{po})する者たち(φιλοσοφούντες)の教授活動とは別のもので彼が見なしていたことが判るだろう。(しかし自分自身を彼らに向けて「フィロソフエイン」する者と呼んでいるのだから、彼は、

自分はフィロソフエイン_{po}する者 (ph_{po}) であると言っている。))

次に [1] に対する弁明から、ソクラテースは自然学も弁論術も教授していないこと、またソフィステースが標榜するような人間教育・市民教育を自らは行っていないということが判明する。彼は自分は σοφισταί のような「知者 (σοφός)」 (20A3) ではなく、だから人間的・市民的な徳についての「知識はもっていない (οὐκ ἐπίσταμαι)」 (20C3) と言っている。徳についての知識 (σοφία, ἐπιστήμη) を持っていない以上、それを教えることはできないというわけである。

まとめると、[1] と [2] からソクラテース・プラトーン的な「フィロソフエイン」, 「フィロソフエイン_{ph}」 (ph_{ph}) ——今日的意味での哲学, 狭義の哲学——とは、人間的・市民的な徳をめぐる問答することである、と言えそうである。それはすでに出来上がった定説を教授することではない (、そうではなく、ソクラテースは「産婆術」⁽²⁷⁾を実践する)。そのような知識は人間には不可能であるかも知れない(「おそらく本当は神が知者なのである」 (23A5-6)) が、しかしそのような知識に到達すべく努力しなければならない。そのように努力する者がソクラテース・プラトーン的な意味での「哲学者_{ph}」 (φιλόσοφος_{ph}) なのであろう。ずっと先では次のように言われている。

「徳について、またその他、私がそれらについて問答し (διαλεγόμενου) 自他を吟味している (ἐξετάζοντος) のを諸君が聴いておられる、そうしたことがらについて毎日談論すること、それが人間にとっては最大の善なのであって、吟味のない生活は、人間が生きるにふさわしい生活ではない」 (38A2-5) 。

つまり、人間的・市民的な徳について談論し、自他を吟味するということが「哲学_{ph}」 (ph_{ph}) なのであろう。

「フィロソフエイン」の二義に応じて「知」(σοφία)にも二義がある。ヴラストスによれば、「教育する (teach [= διδάσκειν])」にも二義があるとされる。ソクラテースは自分には「知識 (knowledge)」も無ければ「教育」したこともないと言っているが、しかし彼はこの通常の意味とは別の意味においては知識をもっていたし教育もしたのだと、ヴラストスは指摘する⁽²⁸⁾。この指摘に従えば、‘φιλοσοφείν_{ph}’ = ‘φιλοσοφείν’ in ironical use, ‘σοφία_{ph}’ = ‘σοφία’ in ironical use ということになるのだろうか⁽²⁹⁾。

「徳について、またその他、私がそれらについて問答し自他を吟味しているのを諸君が聴いておられる、そうしたことがらについて毎日談論すること」、——これを前には、「知を愛し求めながら生きて行く (φιλοσοφούντα ζῆν)」 (田中訳) こととソクラテースは言い、神アポロンが自らに課した使命であるゆえ絶対に放棄しないと断言し (28E, 29D. ——後出, (ii), (iv)を見よ) , また、そのような ‘φιλοσοφούντα ζῆν’ をアテーナイ市民に懲慥したのであ

る（——38A でソクラテースはそれを「最大の善」と言っている）⁽³⁰⁾。このような徳に関する自他の「生活の吟味」がソクラテースによって新しく唱えられることになった哲学（フィロソフェイン= ph_{ph} ）であるが、吟味に基づいて生きること（cf. 39C7）はまた、文字どおり田中の言う「生活の哲学化」⁽³¹⁾に相当するだろう。

A. - II 28E

『弁明』には‘φιλοσοφείν’の登場する文が全部で四つあるが、先ずはそれらをここで提示しておこう。

(i) 23D : 吟味を受けた (ἐξεταζόμενοι) 人びとは……すべてのフィロソフェインする者たち (τῶν φιλοσοφούντων) について言われる決まり文句を、つまり、諸君のよく知っている例のことを言うのである、「空中や地下の事象 [を探索し]」、「神々を認めず」、「弱い議論を強くする」と。

(ii) 28E : 私が思い、また受け取ったところでは、私はフィロソフェインしながら (φιλοσοφούντα), そして自分自身と他人を吟味しながら (ἐξετάζοντα) 生きていかなければならない、というように、神 [アポローン] が私に命じているのに、……」

(iii) 29C : 「ソクラテースよ、われわれは今はアニュートスに従わずに、君を放免することにする、但し、君が今後はそうした探求に目を過ぎず (ἐν ταύτῃ τῇ ζητήσει διατρίβειν), フィロソフェインすることもしないという条件を付けた上でのことだ」。

(iv) 29D : 私は君たちよりもむしろ神に従うだろう。そして私が息をしている限り、また私に可能な限り、フィロソフェインする (φιλοσοφῶν) ことを決してやめないだろう。諸君のうちのたまたま出会った誰に対しても、いつものように……と言って勧告し明らかにすることを止めないだろう。

(i)についてはすでに引用し、若干の考察を加えた。(ii)では‘φιλοσοφείν’の意味がソクラテース・プラトーンのな意味 (ph_{ph}) に変わっている（——加藤説、田中訳にしたがえば、そのように考えなければならない）。そこで、(ii)に到るまでのテキストによって‘φιλοσοφείν’の新たな意味 (ph_{ph}) を探ってみよう。

「もとの訴え」における「宣誓口述書」（本稿 73 頁、[1] 参照）に対して、自然研究も人間教育も自分はやっていないとして、これを斥けた後に、ソクラテースは次のように言う。

「私は、……他ならぬ、ある一つの知恵 (σοφία) によって、この [知者 σοφός という] 名前を得ているのだが、それはいったい、どのような知恵なのであろうか。たぶん、それは人間なみの知恵 (ἀνθρωπίνη σοφία) なのであろう。……これに反して、私が今しがた話題にしていた [ゴルギアース、プロディコス、ヒッピアースらの] 人たちは、何か人間なみ以上の知恵 (μείζω τινα ἢ κατ' ἄνθρωπον σοφίαν) をもつ知者なのかもしれない。……私はそういう知

恵を心得て (αὐτήν (= ταύτην τὴν σοφίαν) ἐπίσταμαι) いない」 (20D6-E2)

私は世間から「知者」(σοφός_{po})という評判を得ているが、そのような評判をもたらしたのは、私にそなわる「人間なみの知恵」(σοφία_{ph})であると言っている。それに対して、σοφιστάι(——自然研究者もこれに含める、)がもつ知恵とは「人間なみ以上の知恵」なのであるうとも付言する。

そして彼は、デルフォイの神アポロンの証言を提出する。それを聞けば裁判官が騒ぐであろうことを予期しながら (20E3-8) (32)。

「[ソクラテースよりも] より知恵のある (σοφώτερος) 者はいない」 (21A7) というのが、彼の若い友、カイレフォーンの伝えるアポロンの神託であった。

ソクラテースは自分には知恵_(po)がない、自分は知者_(po)ではない、と言う。しかしそのソクラテースを、神はもっとも知恵があると言う。両者の証言が矛盾するものではないとすれば、神が証かすソクラテースの知恵は知恵_{po}、すなわち、先の「人間なみ以上の知恵」とは別のものでなければならない(33)。

ソクラテースは、世間から知者と評判され且つまた知者を自認する人びとのもとを訪ねて、問答した。その結果、彼は、

「おそらく本当は、神が知者なのかもしれない、そして…人間の知恵は、ほとんど何の価値もないものだけということ、神は言おうとしているのかもしれない」 (23A5-7) と思うようになった。そして彼は、神託は次のように言っていると解釈した。

「誰でもソクラテースのように、自分は知恵に対しては、実際は何の価値もないものだけということを知った (ἐγνώκεν) 者が、お前たちのうちでいちばん知恵のある者なのだ」 (23B2-4)

と。

ソクラテースは「一例」(23B1)であって、誰でも、自分は知恵_(po)をもたない、知者_(po)ではないと知った (ἐγνώκεν) 者が知恵_(ph)のある者であり、知者_(ph)なのだ、と神アポロンは言っているのだと、彼は解釈した。

そこで彼は、このアポロンのメッセージを宣べ伝えるために市民たちに対する問答活動に乗り出す。これは「神 [アポロン] への奉仕」(23C1: ἡ τοῦ θεοῦ λατρεία) の活動なのである。

「そこで私は今もなお、歩きまわって…だれか知恵_(po)のある者だと思えば、神の指図に従って、…しらべ上げている (ἐρευνῶ) のだ。そして知恵_(po)があるとは思えない場合には、神の手助けをして、知者_(po)ではないということ、明らかにしているのだ」 (23B4-8) と、彼は結んでいる。

アテナイの市民であれ、他国の者であれ、問答によってこの者に無知 (知恵_(po) の無いこと) の自覚を促し、そのような自覚のもとに自他ともに知恵_(po)を愛求すること、このことがソクラテースの言う、新たな意味での「フィロソフェイン」(ph_{ph})、狭義の「哲学」であ

ったのである。このような知恵_(po)の愛求者、すなわち「フィロソフォス_{ph}」は、「知者_{po}」(σοφός_{po})と対立する者としての限りにおいて「知者_{ph}」(σοφός_{ph})と呼ぶことも許されるであろう。それはまた、神からの隔たりにおいてある者として知者_{po}ではなく、知の愛求者(哲学者_{ph})なのである⁽³⁴⁾。

「私はフィロソフェインしながら(φιλοσοφοῦντα)、そして自分自身と他人を吟味しながら生きていかなければならない、というように、神[アポローン]が私に命じている」(28E4-6)。だから、死の危険が迫っているからといって、神によって配置された「持ち場」を放棄することはできない、とソクラテースは言った。しかし、この「フィロソフェイン」は裁判官によって理解されたのだろうか。

これまでの考察で判ったのは、『弁明』に登場する‘φιλοσοφείν’には二つの意味があるということであった。一つは「学問をする」(=「(広義の)哲学する」)であり、これは23Dに登場した。他は「(今日的意味での・狭義の)哲学する」であり、28Eに登場する。田中訳はそれぞれ、「学問をしている」と「知を愛求する」であり、私たちの解釈はこの田中訳を支持していた(——ただし「知を愛求する」が「(今日的意味での・狭義の)哲学する」を意味しているとして)。

B. 田中訳の検討

B-1 田中美知太郎訳への疑問 ——意味することと言うこと

‘φιλοσοφείν’の登場する四つのテキスト(i)-(iv)(77頁)を眺めてみよう。すると、まず、(ii)と(iv)とでは‘φιλοσοφείν’の意味は同じであると言えそうである。さらに(ii)と(iv)では神アポローンへの言及のあることが私たちの注意を引く。ソクラテースは(ii)で「フィロソフェインしながら…生きる」ことは神アポローンの命令である、と言う。しかし、それに対する裁判官の応答[(iii)]は神アポローンに触れるところがない。裁判官は、ソクラテースの言い分を、つまり、自分が哲学するのは、すなわち徳をめぐって自他を吟味するのは神アポローンの命令に従ってのことであるとの言い分をどのように受け取っていたのだろうか。というのも、ソクラテースに対する訴因の一半は神々に対する冒瀆ということにあるのだが、ソクラテースの主張では、彼の哲学は、それとは正反対に、敬神的の行ないであるということになるからである⁽³⁵⁾。ソクラテースの(ii)の言い分に対して、裁判官は(iii)においてそれをまったく無視しているように見えるのだが、それは何故なのであろうか。

田中美知太郎によれば、カイレフォーンの神託事件は、この度の裁判でソクラテースによって初めて明らかにされたということである。「この事件はソクラテースがここに公言するまでは一般に知られていなかったものと考えねばならなくなる」⁽³⁶⁾。ソクラテースの哲学の実践は三十数年前に開始されていたと考えられるが⁽³⁷⁾、その間、彼は神託事件に触れること

を一度もせず、胸底深くに秘めていたのであろうか。それはたいへん不思議なことではないだろうか。

神託事件が今この法廷で初めて明かされたことであるとすると、彼の哲学、つまり問答 (διάλογος | 対話) の意義づけが法廷ではいろいろと述べられているわけだが、そうした意義づけの多くも、——例えば、問答の実践は神アポローンの課した使命を果たすものである、との意義づけも、——裁判以前には彼の口から語られることはなかったと考えねばならなくなるであろう。弁明が上掲のテキスト(ii)に到ったところで初めて、「フィロソフェインしながら生きる」のは神の命令である、と明かされても、裁判官は一体どのようにそれに応接できたのだろうか。

ソクラテースは神託と、神が哲学実践を自分に命じているとの神託解釈を明らかにしたけれども、それは裁判官に何らの衝撃も、否、何らの影響も及ぼさなかったのだと考えてみよう。そして弁明から、彼が神託に言及する部分をすべて取り除いてみることにしよう。すなわち、「ソクラテースよりも知恵のある者は誰もいない」という神託の真意を探り当て、自らに有りとされた「知恵」を「人間なみの知恵」と把握して、同胞市民に対して「大切なことがら」(22D7) についての彼らの無知を知らしめる、ないし暴露することを神への「奉仕」であるとも、また、神の命令に従ったものである (28E, テキスト(ii)参照) とも彼は言っているが、そうした発言は一切なかったものとしてみるのである。そうすると、彼の ‘φιλοσοφείν’ (ph_{ph})——田中訳では、「知の愛求」——を特徴づけるものとして、つまり、従来の ‘φιλοσοφείν’ (ph_{po})——σοφισταί が教授した (自然学や弁論術を含む) 種々の学問は、この意味での ‘φιλοσοφείν’ であるが、——から区別するものとして何が言われていたのだろうか。ほとんど何も言われていなかったのではないだろうか。

そのことはまた、この裁判までに三十数年間にわたり実践された問答の中においてその問答の (つまり彼独自の哲学の) 意義を彼が改めて説明することの無かったであろうことをも示唆している。彼は言っている、——「金も暇もある若者たちが自分のほうからついて来て」「私を真似て問答した」。なるほど「自分のほうからついて来た」のであるから、彼は σοφισταί とは違っていただろう。ソクラテースは若者たちに自分につき従うように説得したのではない⁽³⁸⁾、彼らの父や兄が彼らを説得してソクラテースにつき従わせたのでもないからである⁽³⁹⁾。彼と彼を「真似た」若者たちが行なったこと、「人間的・市民的な徳」(20B5) について「談論し」(38A2)「自他の吟味」(28E6, 38A4)をしたこと (、換言すればソクラテース的 ‘φιλοσοφείν’ (28E5) の実践) は、彼に言わせると、そして事柄としても、弁論術の教授でも、また、およそいかなる知識の教授 (= 伝授) でもなかったから、この点においても彼はたしかに σοφιστής ではなかった⁽⁴⁰⁾。若者に言い負かされた大人たち⁽⁴¹⁾は「自分自身に腹を立てる」のではなく「私に対して腹を立てた」とソクラテースは言っている (23C)。そして彼はこの人たちから、「本当は」(23E8) そうではないのに、世の人びとの言うところの「φιλοσοφείν する者」にされてしまい、「弱い議論を強弁する」という「中傷」を浴びせられ

たと言う (cf. 本稿 77 頁, (i))。彼は「何をし、何を教えて」「若者を腐敗墮落させる」のかと問われると、彼らは答えられなかったが、それでもソクラテースを非難する十分な理由が彼らにはある。「何を教えて」いるかは問題ではなかった。若者たちが「自分から」進んでつき従ったのだとしても、それも問題ではない、と世の人びとはソクラテースに言うだろう。若者たちが彼につき従っていること (、彼と一緒に居る (συνόντες) こと)、そして年長者 (πρεσβύτεροι) を言い負かし、年長者の言うことを聞こうとしないということ⁽⁴²⁾、それで十分なのだ。彼らから見れば、ソクラテースはソフィスト (σοφιστής) も同然であって、ソフィスト的新教育同様の害毒を若者たちに流している。しかも彼は、ソフィストのような他国人ではなく、われわれと同じアテーナイ市民なのだ、それだけになお許し難い……、と彼らは思っただろう。

ソクラテースの問答の実践は前 399 年の裁判まで続き、その期間は 30 数年に及ぶ。そして問答の評判が高まっていくにつれて、彼を「φιλοσοφείν する者」(23D5)、別言すれば、‘σοφιστής’ (=「学者」) (cf. 20A5) とする「中傷」も大きくなっていったことだろう。クセノフーンは次のように証言している (Xen. Mem. I, ii, 31), ——「当時 [前 404 年頃] 一般に学者 (φιλόσοφος) たちに対して世間の非難となっていたもの [=「言論 (λόγος) の技術」] をもって行って彼に移し、民衆の悪評を買わせようとしたのであった⁽⁴³⁾。」彼は「知者」(σοφός) と言われて中傷された (23A)。「知者」と中傷され「妬まれ」たけれども、それに先行してもちろん「知者」であるとの良き評判も得ていたから、やがて神託事件が起きることになった。その名声は神託事件以前にデルフォイの神官たちの耳に届いていた。神託が下り、それを伝え聞いたソクラテースはその真意を探るために自称他称の「知者」たちを「遍歴」(22A) する。「遍歴」はどれくらいの間続いたのだろうか。真意は「謎」(cf. 21B4) と言ったほうがよいかも知れない、——アポローンの懸けた謎は解けた⁽⁴⁴⁾。それ以後は、彼はアポローンの使徒となって、神への「奉仕」としての問答活動に精勤することになる (23C)。

ソクラテースへの色々の中傷は、上に述べたように、神託事件以前から生じていたであろう。なにしろ彼らアテーナイ人は「嫉妬」ぶかいのだ。けれども中傷は、ソクラテースが神への「奉仕」としての問答活動を始めてから一層大きく烈しいものになっただろう (23E)。そしてこの「猛烈な中傷」(23E3) が加えられるなかで、若者を「腐敗墮落」(διαφθείρειν) させるとの攻撃が加えられるようになったのではなかろうか⁽⁴⁵⁾。もしも 23C-E についてのこのような読み方が正しいとすれば、この部分は 19B に言われた「中傷」のよって来る原因を説明するものであったのだから (本稿, 75 頁参照)、若者を腐敗墮落させるとの中傷は、『雲』上演の前 423 年以前に生じていたことになるだろう。それ以来この裁判に至るまでソクラテースは彼独自の ‘φιλοσοφείν’ (ph_{ph}) を実践しながら、周囲からは‘φιλοσοφείν’ (ph_{po}) する者 (cf. 本稿 77 頁, (i)) と中傷され、そしてその中傷を言われるがままに甘んじて受け入れていたように想像される。

そのことは私たちを田中訳に対する次のような疑問に導くのである。それは、テキスト(ii)の「φιλοσοφείνしながら生きていく」(28E)の‘φιλοσοφείν’を田中訳のように「知を愛求する」——「知の愛求」がソクラテースによって始められた、今日的な・狭義の「哲学」を意味するとして、——と訳するのは誤りではないのか、という疑問である。それをもっと詳しく説明すると——、‘φιλοσοφείν’で意味されている (to be meant) のは、ソクラテース独自の〈φιλοσοφείν〉(=ph_{ph})であったとしても、言われている (to be said) のは、ソクラテース以前から一般に世間の人びとによって理解されていた〈φιλοσοφείν〉(=ph_{po})ではないのか⁽⁴⁶⁾、したがって、訳語としては ph_{po}を表わす言葉を採用すべきではないのかという疑問である。

『弁明』でのソクラテースの抗弁を思い起してみよう。それは、まず、自分は自然学について問答したことがないこと、人間的・市民的徳の知を所持しないが故にこれを教授したことのないことを述べる (19A)。次に、——アポローンの神託とその真意の解明、そのための「知者」探しの「遍歴」に言及する部分を抗弁から除外すると、——「中傷」のよって来た原因の説明 (23D-E. テキスト(i)参照)が続く。さらに第三に、メレートスへの反論が続く。以後は自らをアキレウスになぞらえて死の危険を冒しても正義を為すべきことを述べて (ch. XVI, 問題の‘φιλοσοφείν’ (28E. テキスト(ii)参照)に到っている (ch. XVII)。ソクラテースの抗弁をこのように縮小してもよいとすれば、ソクラテースの新たな‘φιλοσοφείν’とは、前述のとおり、人間的・市民的な徳について同胞市民と問答することであるとしか説明できないのである。その内実は、神託解釈に基づく——例えば、神ならぬ人間の分を弁え (γνώθι σαυτόν), そこに留まれ (μηδὲν ἄγαν) と論ずもの、といったような——意味付与を度外視すると、まことに貧寒である。アテーナイの大多数の市民からすれば、彼と σοφισταίの違い、彼が「何をし何を教えて」いるかということは問題ではなかった。若者たちが彼に従い、大人たちの言うことを聞かないことが問題なのである。彼らに言わせれば、ソクラテースは σοφισταί 同様に、あるいは「すべての φιλοσοφείν する者たち」同様に若者を腐敗墮落させているのである。

このことから私たちは、28Eの‘φιλοσοφείν’をソクラテース的に(、すなわち ph_{ph}に)ではなく、彼以前からあって世間一般に流通していた意味(ph_{po})に訳すべきではないかという考えに導かれる⁽⁴⁷⁾。次のように言うことで問題の在り処を指し示しておこう。——(ii)も(i)と同様に ph_{po}を表わす語に訳す⁽⁴⁸⁾。しかし彼は ph_{po}を言い (to say) つつ、そのことをとおして ph_{ph}を意味 (to mean) していたと。

B.Ⅱ 田中訳への疑問 —— 「生活の哲学化」に關説して

田中美知太郎は 28E: ‘φιλοσοφοῦντα ... δεῖν ζην’ (「フィロソフエインシ [田中訳: 知を愛し求め] ながら生きて行かなければならない) について、次のような註釈を与えている⁽⁴⁹⁾。

——これは新しい規定で、デルポイの神託については、次の ἐξετάζοντα ἑμαυτὸν καὶ τοὺς

ἄλλους [田中訳:「私自身でも、他の人でも、誰でもよくしらべて」]が 23B の ζητῶ καὶ ἐρευνῶ κατὰ τὸν θεὸν ... τῷ θεῷ βοηθῶν ἐνδείκνυμαι [田中訳:「神の指図に従って、探して、しらべ上げている・・・神の手助けをして・・・明らかにしている」]などが対応するけれども、 φιλοσοφούντα ζῆν [田中訳:「知を愛し求めながら生きて行く」]は新しくここで言われたことになる。それが何を意味するかはいろいろ問題を含む。それが神命である限り ἐξέτασις [自他をよくしらべること、吟味すること]と別ではないであろう。その ἐξέτασις は τῷ ὄντι ὁ θεὸς σοφός — ἡ ἀνθρωπίνη σοφία ὀλίγου τινὸς ἀξία ἐστὶν καὶ οὐδενός (23A [田中訳:「神だけが本当の知者——人間の知恵というようなものは、何かもうまるで価値のないものなのだ」])を明らかにするもので、一種の仕方でも σοφία [知恵・知識]を大切な問題としている。この φιλοσοφία [しかしこの名詞形はソクラテースの知らなかった言葉である。Cf. 本稿 72 頁]の意味はどこから来たか、φιλοσοφούντα ζῆνと言われるように、生活の哲学化が考えられるところも注意されなければならぬ。φιλοσοφία の自覚はピュタゴラスについて (Diogenes Laertius I, 12) 伝説されているけれども、現存の文献ではヘラクレイトスの言葉 (Diels = Kranz Fr. 35) が最古であろう。しかしソクラテースの φιλοσοφία は彼にとって独自の意味をもっているように思われる。[以下 3 行は省略]

田中訳についてすでに種々述べてきたが、私が言おうとしたのは、ここに登場する「φιλοσοφείν しながら」がソクラテースにとって「独自の意味をもっている」としても、そしてそのことを私は認めないのではないが、この「φιλοσοφείν」を「知を愛し求める」と訳すことには賛成しがたいということである。論点を鮮明にするために、敢えて言うと、こうなるだろう。つまり、私ならば、ここの「φιλοσοφείν」もまた 23D の「φιλοσοφείν」と同じように、「学問する」と訳したいということである。或いはまた、私ならば、次のように訳してみようとも思う。——23D については「すべての求知者⁽⁵⁰⁾について、すぐに言われるような、例の・・・」と訳し、いま問題となっている 28E については、「[人間的・市民的な徳について] 求知しながら生きていかねばならない」。要するに、田中のように前者の「φιλοσοφείν」に「学問している」の訳語を与え、後者の「φιλοσοφείν」に「知を愛し求める」の訳語を与えること、すなわち二つの「φιλοσοφείν」に別々の訳語を与えることには賛成できないのである。たとえ二つの「φιλοσοφείν」の意味が異なっているとしてもである。その理由については、すでに述べてきたつもりであるが、以下においても更に説明していきたいと考える。

B. — III 「裁判する諸君」という訳語について —— 田中訳への批判の初めに

「諸君のうち」で私の弁明に「不満」を覚えた人 (= 裁判官) の内的独白もしくは心の内なる思いをソクラテースが間接話法で語る部分を取り上げる。そこでまず、この「不満」を直接話法で語るとすれば、どうなるだろうか? それは引用符のなかに次のように明かされるであろう。(主語が三人称から一人称に、それに伴い、ギリシア語では動詞形の人称語

尾に変更が生じる。時と場所を表わす指示詞等も一人称主語の立場から言い換えられる。)

「私は [←自分は] これよりも小さな訴訟事件を … 私 [←自分の] 子供を… τοὺς δικαστὰς [34C3] に嘆願した… ソークラテースは [←私は] と見れば … と私には思われる [← [自分には] 思われる]」

この「不満な」裁判官は、もし語るとすれば、このように語るであろう。それがソークラテースによって間接話法形で伝達されても、‘δικαστὰς’ はそのまま残存したというのがテキストの部分である⁽⁵¹⁾。

彼は δικαστής であり、彼が ‘δικαστὰς’ と言っているのである。彼は文字どおりの (literal)、つまり辞典に記されている意味で、「裁判官」と言っているのである⁽⁵²⁾。それをソークラテースが間接話法で語っているのであるが、しかしそれを「裁判する諸君」と訳するのは適正であるだろうか。ソークラテースはここまでの弁明において、裁判官に対して ‘ὧ ἄνδρες δικασταί’ (裁判官諸君) とではなく、‘ὧ ἄνδρες Ἀθηναῖοι’ (アテナイ人諸君) と呼びかけていた。というのも、彼には「裁判官」のうちの誰が真の裁判官であるかは判決が出るまでは分からなかったのであり、‘δικασταί’ という呼びかけを意図して慎重に避けていたからである⁽⁵³⁾。刑の確定した後、ソークラテースは「無罪の投票をしてくれた」(39E1) 裁判官に、「諸君を裁判官と呼ぶのが正しい呼び方というものだろう」(40A3) と言っている。自分に対して無罪の票を投じてくれる者が「裁判官」と考えている。そのような考えを持って弁明するソークラテースが物言わぬ裁判官のうちの或る人の、もしかしたら現にそのような思いを懐いているかも知れぬ、その思いを、間接話法で伝えている。このとき、田中訳のように、ソークラテースの考えに沿って、「裁判する諸君」と訳出するのは正しいことであろうか⁽⁵⁴⁾。過激な言い方になるが、それは著者のプラトーンもしなかった一種の暴力を、訳者がこの「不満な」裁判官の上に揮っていることにはならないのか。それはとても正しいこととは言えないと私は思う。畏れ多いことながら、traductore traditore とならないことを私は田中先生のために願う者である。

というのも、ソークラテースの考えは上に見たとおりであったにせよ、彼が ‘δικαστὰς’ と言ったとき⁽⁵⁵⁾、裁判官たちはこの言葉をまさに δικαστὰς を表わす言葉として聞き取った、すなわち「裁判官」と聞いたであろうからである。それならば、そのように、「裁判官」と訳出すべきではないのか。たとえ、ソークラテースが ‘δικαστὰς’ に彼個人の私的 (private) な思いを乗せて語ったとしても、それを彼は五百人の裁判官のうちの、誰かの言葉として、言い換えると、この誰かをその主語とする言葉として語っている。たしかにソークラテースが語っているのだが、しかし、それは裁判官に向けて、裁判官に聞かれるものとして彼によって語られている。言葉は公共的 (public) なものであり、ひとは公共的な言葉を用いて意思疎通しているのである。田中訳は、ソークラテースの思想を言語のうちに表出し、以て私た

ち読者にこれを残らず伝達しようとした点において、間違いなくその功績は大きいであろう。しかし、『弁明』がソクラテースのモノローグ(独話)としてではあれ、対話劇であること、また、仮想上のこととはいえ、裁判官との間に、しかも哲学的に重要な、対話(例えば 29C-D, cf. 本稿 77 頁(ii)-(iv))を含んだものであること、これら二点から見ると、田中訳は大きな問題を含んでいると言わなければならないのではないかと。ソクラテース個人の思いは言語的に、言い換えると、公共言語のうちに表出されているのではないであろう。(彼は個人の思いを語っている(say)のではない。)それゆえにまた、これは言語のうちに訳出されるべきではないと考えられる。

ソクラテースと裁判官の対話は、(ソクラテースの仮想上のものとはいえ、)成り立たなければならない。そこにおいてはソクラテースの言葉はアイロニー⁽⁶⁶⁾的に語られていると見るべきであろう。そして私たちはプラトーンテキストによってソクラテースの弁明を読むわけであるから、田中訳が伝えようとしたソクラテースの思いはコンテキストから読みとらなければならないだろう。

B-IV 「知の愛求」という訳語について —— 田中訳への批判

田中訳について指摘した以上の難点は、また、より根本的に重大な、「フィロソフェイン」をめぐる為されるソクラテースと裁判官の(ソクラテースの仮想上の)対話にも現れているのではないだろうか⁽⁶⁷⁾。

この対話の田中訳を読むと、これもまた、ソクラテースと裁判官との間の(仮想上のものとはいえ)対話を綴ったものではない、との思いを強くする。というのは、田中訳においては、裁判官が語っているのではなく、裁判官の口を借りてソクラテースが語っているからであって、だから、この訳はソクラテースと裁判官の対話(dialogue)ではなく、実はソクラテースの独話(monologue)でしかないと思われるからである。そして原形的な哲学のソクラテースにおいて成立してくる有様は、田中訳のうちにこれを探ってみたところで、結局は徒労に終わるのではないかという懼れを私は懐くのである⁽⁶⁸⁾。なぜなら、ソクラテースと裁判官との(仮想上の)対話において、裁判官は、ソクラテースの哲学に対して、これを断念せよと迫っているのであるから、彼の哲学はすでに出来上がっているかのようであり、裁判官はそれに与するのではないが、それがどのようなものであるかは理解しており、そのような彼の哲学をめぐる彼ら両名によって、ということつまり、公共的な言語において言葉が戦わされているということになるからである。

それではどのような対話が交わされたのか、それを見てみようではないか。

「神が命令している、と私は思いまた受け取ったのだが、私は知を愛し求め[田中訳]ながら(φιλοσοφούντα),そして私自身と他の人びとを吟味しながら(ἐξετάζοντα)生きていかなければならないと命令しているのに…」(28E4-6)

田中は、「φιλοσοφοῦντα ζῆν [知を愛し求めながら生きて行く] は新しくここで言われたことになる。それが何を意味するかはいろいろ問題を含む」と注記する⁽⁵⁹⁾。しかしこの「生活の哲学化」(同上箇所)ということが裁判官——これはポリス・アテナイを代表する、アテナイの平均的市民である、——には「新しく…言われたこと」であったとすれば、「それが何を意味するかは」彼らにとって全く与り知らぬことではなかったか。ソクラテースが自らの「知の愛求」(田中訳: φιλοσοφείν)は、神アポローンが為せと命じていることであるから、これを放棄することはできないと宣明したところで、それは彼らには理解のできない言葉であったのではないか。

ソクラテースはこれに続けて、彼の仮想上の裁判官に(——田中訳にしたがえば、——)次のように応答させている。

「ソクラテースよ、われわれは今アニュートスに従わずに、君を放免することにする、但し、君が今後はそうした探求に日を過ぎず、知を愛し求める [田中訳: φιλοσοφείν] こともしないという条件を付けた上でのことだ」(29C7-9)。

しかし、ソクラテースの仮想上の対話ではあっても、裁判官はソクラテースに、「知を愛し求める」ことを放棄せよ、と言ったのか。「彼 [=ソクラテース] にとって独自の意味をもっている」(田中, 前掲箇所。傍点は引用者)言葉としての‘φιλοσοφείν’を裁判官は語る事ができたのか。裁判官は自分がすでに知っている、そしてすでに使用したことのあるかも知れない‘φιλοσοφείν’を——それが人びとの間を行き来する公共の言葉というものである、——語っているのではないのか。(たとえソクラテースの仮想した対話においてのことであり、現実にはソクラテースが語っているとしても。)しかしもしそうだとすれば、それは「知の愛求」とは別のことを「意味する」語であったはずである。そして、「知の愛求」が「何を意味する」かはともかく、田中訳ではソクラテースと裁判官の間を同じこの言葉が行き来しているのだから、彼らの間に対話は成立しているように見えるし、また、そうしか見えないのだが、しかし、真実には、ソクラテースが彼「独自の意味 [=「知の愛求」]をも(つ)」「φιλοσοφείν」を語っている以上、彼と裁判官の間には対話は成立しえないのではないだろうか。両者の語る‘φιλοσοφείν’は別の言葉であるからである。

いったい、ソクラテースが彼独自の‘φιλοσοφείν’を語るということは可能であろうか。彼が‘φιλοσοφείν’という言葉に、いわば勝手に、彼独自の意味を付与し、それを使用するというのは有りえぬことだろう。言語が公共的であるということがそれを不可能にしているのである。だからソクラテースも上の仮想上の対話において、裁判官に、この裁判官がすでに知っている、そしてすでに使用したことのあるかも知れない‘φιλοσοφείν’を語らせているのである。その‘φιλοσοφείν’とはどういう言葉であるのかと言えば、次のテキストに現れて

いる ‘φιλοσοφείν’ がそれであると、差し当たっては答えておこう。

「[吟味を受けた (ἐξεταζόμενοι) 人びとは] すべての φιλοσοφείν する者たちについて言われる決まり文句を、つまり、諸君のよく知っている例のことを言うのである、『空中や地下の事象 [を探索し]』、『神々を認めず』、『弱い議論を強くする』と」(23D5-7)。

ここでソクラテースは、自分に対する「中傷」が生じたわけを裁判官に説明している。彼は「すべての φιλοσοφείν する者たち」という言葉で φιλοσοφείν する者(——これを φιλόσοφος と言い換えてもよい、)たちを聞き手である裁判官に向けて指示 (refer) し、裁判官は話し手であるソクラテースが指示している者を同定 (identify) しているだろう。すなわち、ここでの ‘φιλοσοφείν’ はソクラテース独自の「意味」をもつ言葉 (ph_{ph}) ではなく、ソクラテースと裁判官に共通する、公共の言葉であり、人びとの間ですでに流通している言葉、popular sense における ‘φιλοσοφείν’ (= ph_{po}) である。そしてそのような意味での ‘φιλοσοφῶν’ (‘φιλόσοφος’) たちの中に、若者から「吟味を受けた人びと」はソクラテースを数え入れ、またソクラテース自身も自分をそのような φιλοσοφῶν (φιλόσοφος) と見ているのである。そうではないのか？

私たちがギリシア哲学を少しばかり学び、「知の愛求」が哲学(の原形)を意味する言葉であるという知識をもって『弁明』の田中訳に臨み、そして「知を愛し求めながら生きて行かなければならない」という言葉に出遭ったとき、私たちは大きな感銘を覚えると同時に、しかし唐突との感をも受ける。「知の愛求」というソクラテース「独自の意味」をもつ言葉が、何の説明もなされずに、いきなり語り出されているように思われるからである。これは奇異なことではないだろうか。そうではなくしてソクラテースによって語られているとすれば、また、プラトーンによって書かれているとすれば、それはソクラテースの弁明を聞く者にとって、またそれを読む者にとって、‘φιλοσοφείν’ はなんら耳新しい、あるいは目新しい言葉ではなかったということであろう。つまり、‘φιλοσοφείν’ はすでに知られていた言葉、言い換えると、popular sense における ‘φιλοσοφείν’ であるということであろう。

私たちが田中訳を読んで、「知の愛求」(28E)の出現を唐突に思い、奇異な感じを覚えるのは、田中訳が 23D5: ‘φιλοσοφούντων’ を「学問をしている」と訳し、28E5: ‘φιλοσοφούντα’ を「知を愛し求め」と訳して、訳語を変えているためである。そのために「知の愛求」が、否、その原語である ‘φιλοσοφείν’ が 28E に初めて現れたように思ったからであり、その際に私たちの側においても ‘φιλοσοφείν’ は「(狭義の) 哲学」のみを意味するとばかりに思い込み、それを含む「(広い意味での) 学問一般」(=「(広義の) 哲学」)をも表わす言葉として、他ならぬソクラテースその人によって使用されているということには想いももらなかったからである。じじつ、ソクラテースの弁明はあのように語られ、また書かれたのだから、28E5 における ‘φιλοσοφούντα’ の出現は唐突でも奇異でも、また不自然でもなかったのである。

二つの φιλοσοφείν は、すなわち 23D の φιλοσοφείν と 28E の φιλοσοφείν は同じ「意味」の言葉であり、いずれも popular sense をもつ言葉である。そうではないのか。

28E ではソークラテースはこう言っていた。

「私は φιλοσοφείν しながら (φιλοσοφούντα), そして私自身と他の人びとを吟味しながら (ἐξετάζοντα) 生きていかなければならない」(28E5-6)

自他の吟味と φιλοσοφείν の関係について言えば、前者が後者に包摂されるということと、前者が(より広義の)φιλοσοφείν を限定しているとともに、その内実を明かしているということであろう。そして自他の吟味という「意味」での φιλοσοφείν がソークラテース「独自の意味をもつ」実践であり、すなわち狭義の φιλοσοφείν なのである。それは田中訳「知の愛求」が言い表わしているもの、ないしは原形的哲学である。

「学問をしている」(田中訳)と訳された ‘φιλοσοφούντων’ の登場する 23C-D も 28E と同じように読むことができるのではないか。

若い者たちがソークラテースの真似をして世間の人びとを「吟味 (ἐξετάζειν)」(23C7) した。彼らはソークラテースに腹を立て、彼を非難した、

「すべての φιλοσοφείν する者たちについて決まって言われる例のこと、つまり、『空中や地下の事象 [を探索し]』、『神々を認めず』、『弱い議論を強くする』と言って」。

ソークラテースは他人も、また自分自身も認めているように、(広義の)φιλοσοφείν する者であり、したがって、その意味での、言い換えると popular sense における φιλοσοφείν を実践し、かつまた、自他の吟味をも行なっていたということであろう。23C-D も 28E の「φιλοσοφείν しながら (φιλοσοφούντα), 自他を吟味しながら (ἐξετάζοντα) 生きていく」と同じ事態を描写したものとして、つまり同じ一つのソークラテースの実践を、あるいは「生き方」(a way of life)⁶⁰を述べたものとして受け取ることができるのではないだろうか。もしもそうだとすると、田中訳における「学問する」と「知の愛求」のように、訳語を変える必要は全然ないことになるだろう。もっと強い主張をするならば、田中訳のように訳語を変更してはならない、ということである。もしも「知の愛求」がソークラテース「独自の」φιλοσοφείν を表わす言葉であるならば、それを裁判官が語るというのは有りそうにないことである。しかし逆に、裁判官が「学問する」という意味での φιλοσοφείν を止めるようにとソークラテースに求めたとすれば、それはそれで、また、——「知の愛求は止めない」というソークラテースの言葉に、「学問するのを止めろ」と言い返すのであるから——返事にならないノンセンスな返事であるし、そもそもその場合には、両者の間に対話が成立していないということになるのである。私たちはもちろん、田中訳からソークラテースの哲学を学ぶことができる。しかしこの訳は、ソークラテースと裁判官の対話を、——たとえ、それがソークラテースの仮想上のものとはいえ、——訳している、あるいは移しているのではない、と私たちは言わ

なければならない。

田中訳に伴うこのようなアポリアを回避するには、23D と 28E における ‘φιλοσοφείν’ の訳語を同じにすればよいのである。『弁明』には四つの箇所にも ‘φιλοσοφείν’ が登場するが、三度目に登場する ‘φιλοσοφείν’ (29C9) については、これまでの議論によって問題はすでに解決されたものと考えてよい。また最後、四度目の ‘φιλοσοφείν’ (29D5) には二度目のそれと同じ訳語を充てることにして何も問題はないだろう。28E も 29D もともにソクラテースが哲学放棄を拒絶することを宣明したものだからである。

それでは何故、田中は訳語を変えなければならないと考えたのであろうか。それは「生活の哲学化」に言われる「哲学」の独自性を明示する、すなわち言語によって表出する必要がある、と考えたからであろう。しかし田中のように「知の愛求」という訳語を充てたところで、この訳語から問題の独自性が見えてくるというわけでもないのである。たとえば出隆によるアリストテレスの『形而上学』の訳書⁽⁶¹⁾には、

「タレスは、あの知恵の愛求〔哲学〕の始祖であるが、「水」がそれ〔原理〕であると言っている」(983b20) ⁽⁶²⁾

とあるが、ここでは、「知の愛求」は広義の哲学を指示していて、田中訳の「学問」(23D) と同じ意味の語になっている。したがって、「知の愛求」がソクラテースに「独自の意味」を表わすことができるためには、それが何についての知なのか、あるいは彼の「学問」がいかなる「学問」であって、諸他の「学問」からどのように区別されるのかを示す必要がある。そしてそのためには、「知の愛求」であれ「学問する」であれ、いずれの訳語であっても差し支えないが、ただ、一度目の ‘φιλοσοφείν’ (23D5) と二度目の ‘φιλοσοφείν’ (28E5) の訳語を同じにするのがよいと私は考えるのである。そうすることで、ソクラテースの φιλοσοφείν を、広い意味での φιλοσοφείν の一種とし、その他の φιλοσοφείν との差異(種差)を考察することの、すなわち学問一般のうちにそれを定位する道が開かれて来るであろうからである。

ここで私たちはすべての ‘φιλοσοφείν’ に同一の訳語として、今、試みに、「求知する」という言葉を充てることにしてみよう⁽⁶³⁾。このようにした後に、ソクラテース独自の「フィロソフエイン」を表現するものがコンテキストのうちに見出されるのを私たちは期待するのである。

- (i) 23D : 「すべての求知 (φιλοσοφείν) する者について決まりきった、例のこと、つまり、『空中や地下の事象 [を探索し]』、『神々を認めず』、『弱い議論を強くする』と言って」
- (ii) 28E : 「私は求知 (φιλοσοφείν) しながら、そして私自身と他の人びとを吟味しながら生きていかなければならない」

私たちは、とくに(iv)のコンテキストに現れる、「金銭—評判・地位—思慮・真実」の三つ組(トリオ)と「精神の気遣い」の考察に向わなければならない。この三つ組はプラトーンの

「魂の三部分説」に関連する⁽⁶⁴⁾とともに、古代ギリシアの「民衆倫理」⁽⁶⁵⁾においては伝統的に幸福の三候補と考えられて来て、それ故にアリストテレスが自らの幸福 (εὐδαιμονία) 論を展開するに先立って、批判の俎上に載せたものである⁽⁶⁶⁾。それはまた、最盛期アテナイの指導者ペリクレスが、その名高き国葬演説において、市民各人の国事 (τὰ πολιτικά) への専心のうちに調和的統一を獲得すると誇ったものである⁽⁶⁷⁾。私たちはそれにソクラテースの「勸告」(29D5) を対照し比較したいと思う。そうすることでプラトーンと異なる歴史的ソクラテースの境位に、彼において成立した哲学の原形に迫ることができると期待するからである。しかし紙幅は尽きた。この企てを遂行するのは他日のこととして、今はひとまず稿を閉じることにしよう。

[注]

- (1) 本稿は平成 24 年度後期開講の「哲学講義 (二)」(講義題目: 『弁明』再考—哲学成立の風景を眺める) の中間総括である。本稿はその際の講義ノートと、教養教育科目「哲学」(講義題目: 『弁明』を読む (I) (II)) において配布した資料に基づいてできたものである。また、副題に記した田中訳は、プラトーン (田中美知太郎・池田美恵訳) 『ソクラテースの弁明・クリトーン・パイドーン』(新潮文庫, 2005 年) を指し、これを私はそれら二つの講義において教科書として使用した。
- (2) 齋藤忍随「古代」(岩崎武雄・山本信編『新版 哲学概論』北樹出版, 2001 年, 19 頁)
- (3) アリストテレス (出隆訳) 『形而上学 上』岩波文庫, 1969 年, 32-3 頁
- (4) 加藤信朗『ギリシア哲学史』東京大学出版会, 1996 年, 7, 8 頁
- (5) 同上書, 6 頁
- (6) 同上書, 7 頁
- (7) 同上書, 8 頁
- (8) もしもプラトーンが対話篇を著わさなかったとすれば、哲学はソクラテースによって始められたが、しかし彼の死とともに消滅していたかも知れない。彼の対話活動は何時開始されたのか。カイレフーンの神託事件以前の、また、この事件がペロポネネソス戦争 (西暦紀元前 431 年) 以前のこととしても、彼の対話の実践は、つまり哲学はせいぜい、およそ四十年のいのちであったに過ぎないだろう。これに関してはホワイトヘッド (A. N. Whitehead) の有名な言葉を思い起してみよう。ホワイトヘッドは、藤澤令夫によると、こう言ったのである。「ヨーロッパの哲学の伝統の特質を全般的に、いちばん間違いなく言い表わすには、この伝統が、プラトーンに対する一連の脚注から成り立っていると述べればよい」(プラトーン (田中美知太郎・藤澤令夫訳) 『ソクラテースの弁明ほか』中公クラシックス, 2010 年, 1 頁)
- (9) 意味の考察と訳語の選択という二つの課題をここに提示したわけを説明しておこう。後に示すよう

に、『弁明』の ‘φιλοσοφείν’ は二つの意味を持っていると考えられる。一つは広く「学問をする」という意味であり、他は「(今日的意味で) 哲学する」という意味である。田中訳は前者の ‘φιλοσοφείν’ に対して「学問をしている」を、後者のそれには「知を愛し求める」を与えている。しかし「学問をしている」と「知を愛し求める」はそれぞれの ‘φιλοσοφείν’ の意味内容を正しく伝えているとしても、訳語として採用することはできないように思われる。ソークラテースは「フィロソフェイン」という同じ音を発し、裁判官は同じ「フィロソフェイン」という音を聞いているから、というのが、その理由にもならない理由である。

- (10) プラトーンは対話篇を著わしたと言われるとおり、『弁明』は対話劇（——メレトスへの尋問部分を除くほとんどの部分はソークラテースのモノログではあるが、）であって、文字として書かれた『弁明』は対話劇の台本に似たものと考えべきである（——台本には役者のセリフに加えてト書きも記されているが、対話篇にはそれがない）。これに関しては、A・コイレ（川田殖訳）『プラトン』みすず書房、1981年、10頁を参照。コイレは次のように言う、「プラトンの対話篇のどれかを読んで、それが上演可能であり、舞台上にのせることができると感じない人はいない」と。そして「このことは実行された。すなわちケクロ（前 106-43）の時代のローマの教養人たちはいろいろな対話篇を上演させたのである」と注記する。
- (11) 意味はすべて言語によって表出されるというのではなく、（——学術論文においてはそうであるとしても、）表情や声の調子など（の非言語的手段）によっても表現される、というのは自明のことではないだろうか。アイロニー（irony）もまた、言葉の字義通りの意味（literal meaning）と反対の意味を伝達するための語り方である。Cf. G. Vlastos, *Socratic irony in Socrates Ironist and Moral philosopher*, Cambridge U. P. 1992, p. 21（拙訳「ソークラテースのアイロニー」、『山形大学人文学部研究年報』第九号、2012年所収、75頁参照）
- (12) Cf. クセノフォーン（佐々木理訳）『ソークラテースの思い出』岩波文庫、1980年、5頁：「前 393年、当時相当に知られていたソフィストのポリュクラテースの『ソークラテースの告発』が出版され、それがアニュトスの法廷でのべた告発の草稿と、一般に信じられるに至った。この空気に対して、プラトーンも筆をとり、そしてクセノフォーンもとった。」さらに、cf. 内山勝利訳『ソクラテース言行録 1』京都大学学術出版会、2011年、288-9頁：「本書の成立時期や過程は明らかではない。前 390年代後半からの「ソクラテース文学」の盛行やポリュクラテースのソクラテース批判文書を受けて、390年代のはじめに彼がスパルタやエリスの小邑スキルュスの地で落ち着いた生活に入ると間もなく着手されたことは確かであるが、・・・。」
- (13) 執筆された『弁明』は、製本され、書物として流布したのではないのか。流布することで、ソークラテース裁判の不当を世に訴えることができるからである。ソークラテースのメレトスへの反論（Ap. 26D）から、裁判の当時（399 B. C.）アテーナイの識字率は高く、また書物を安価に入手できたことが窺える。柳沼重剛によると、その当時テキストは、「大文字ばかり、分かち書きなし、句読点なし」で筆記されたから、音読する（自分で音読する場合と、奴隷などに読ませて自分は聞くという場合がある）のが普通の読み方であった（『トゥキュディデスの文体の研究』岩波書店、2000年、256

頁)。しかしそのようなテキストを読むことは、私たちにはとても困難であるから、当時の識字率の高さが訝しく思われるのである。しかしまた、柳沼によると、あのような筆記法の前提として、「言葉とは音声で伝えられる言語 (spoken language)」であって、「書かれた文章はその記録、場合によっては、符牒にすぎない」(同書、252頁)という考え方が古代ギリシア社会を支配していたということである。

- (14) J. Burnet, *Plato's Euthyphro Apology of Socrates and Crito*, Oxford, 1970, p. 64 には次のようにある。「プラトーンのねらいは、ソクラテースの思い出を守ることである。そして裁判に居合わせた人々の多くは『弁明』が出版されたときには、いまだ存命であったに違いないから、ソクラテースの態度や弁明の主要な筋について作り話を拵えたりすれば、彼は自分の目的を果たせなかったであろう。それゆえ、演説を「その実質については」、ソクラテースによって述べられた本当の弁明であると見做してよいかどうかを問うのはまったく正当なことである。これは第一級の重要性を持つ問題である。この問題の答が然り、そう見做してよい、ということになれば、『弁明』は「歴史的ソクラテース」を再構成するためのもっとも安全な基礎を提供するであろうから。」
- (15) 田中美知太郎訳には新潮文庫版、中公クラシックス版、岩波書店刊『プラトン全集』版の三種があり(——他にもあるかも知れない)、それぞれに異なった翻訳となっている。出版社の事情はともあれ、田中は訳者としていずれの訳を決定訳とするかを表明すべきであったらう。その哲学的・学問的ないし概念的意味内容の点からはいずれの訳も採用可能であるとしても、先述のごとく、『弁明』は学術論文ではなく、したがって、単なる概念的意味内容以上の観点からいずれか一つの翻訳を採用することを決定すべきなのである。ソクラテースの弁明を「です・ます」調で訳すのは適切なかと私たちは問いたい。ソクラテースの弁明は彼のただ一回限りの行為であった。翻訳もまたただ一通りしかあり得ない。
- (16) 加藤信朗、前掲書、4頁。また、山本信『哲学の基礎』北樹出版、2009年、12頁などを参照。
- (17) 加藤信朗、前掲書、4-5頁
- (18) 加藤信朗、前掲書、6頁：「前五世紀に見出されるこの [philo と sophos から成る] 合成語には名詞形・分詞形・形容詞形があるが、名詞形はない。前四世紀になってはじめて名詞形が加わる。」
- (19) *Phaed.*68B-C では、φιλοχρήματος と φιλότιμος は φιλοσώματος の二種として φιλόσοφος また (φιλόψυχος ではなく、いわば) φίλος ψυχῆς に対立せられ、「魂の三部分説」またイデア説に組み込まれている。この ‘φιλόσοφος’ はイデアの知を愛求する者、すなわち非ソクラテース的・プラトーンのな哲学者を表わす。
- (20) 加藤信朗、前掲書、6頁。
- (21) philosophical sense と popular sense を区別するのは、Dover や Pearson の考えに示唆されたものである。Cf. K. J. Dover, *Greek Popular Morality in the time of Plato and Aristotle*, Blackwell, Oxford, 1974, p. xi, p. 1 ff. また、L. Pearson, *Popular Ethics in Ancient Greece*, Stanford U. P., 1962, pp. 210-12.
- (22) ギリシア語の原典としては、田中美知太郎校註『原典 プラトン ソクラテースの弁明』岩波書店、1982

年を使用した。

- (23) 少なくとも二十数年まえから。ソクラテースをソフィストとして描くアリストファネースの『雲』の上演は前 423 年のことであり、したがって、その何年か前からソクラテースの「教育」がアテナイ市民の注目するところとなっていたと推定される。因みにパーネットはソクラテースの間答活動は遅くとも前 435 年には始まっていると見ているようである。Cf. J. Burnet, *op. cit.* p. 75
- (24) 24C9 ff. のソクラテースのメレートスへの尋問 (ἐρώτησις) について, cf. Burnet, *op. cit.*, p. 106 : 「証人に対する反対尋問 (cross-examination) はアテナイの司法手続きが知らなかったものである。しかし他方では, [原告, 被告の] いずれの側にも相手側を尋問 (interrogate) する権利が認められていた。尋問された側は返事を拒むことはできなかった (*infra* 25D2)。」なお, 米国の陪審裁判における反対尋問については, F・ウエルマンの古典的名著『反対尋問』(梅田昌志郎訳, 旺文社文庫, 1979 年) が, その技術, 実例を詳述している。この裁判制度の下での反対尋問なる技術が時にもたらす恐ろしい不正は, 米映画『評決』(S・ルメット監督, P・ニューマン主演, 1982 年) によっても窺うことができる。
- (25) 田中訳「人間教育」に対応する原語は 'παιδεύειν ἀνθρώπους' である。「人間教育」における「人間」は教育内容 (英語ならば直接目的語によって示されるだろう,) を表していると思われる。しかし原語の 'ἀνθρώπους' は 'παιδεύειν' という動作の及ぶ相手を表している (英語ならば間接目的語として訳される)。もちろん田中は百も承知の上でこのように訳出しているのであろう。そして事態的に見て, この訳語は間違っていないだろう。つまり「人間教育」という言葉で「人間的にして市民的な徳の教育・教授」が意味されていると見られるからである。なお, 「ボリスの動物」であった当時のギリシア人にとっては「人間的」は「市民的」に重なり, これを超え出るものでなかった。Cf. 田中美知太郎『ソフィスト』講談社学術文庫, 2002 年, 183 頁
- (26) 田中美知太郎『ソクラテース』岩波新書, 1971 年, 75 頁 Cf. アリストファネース, 『雲』, 360 行 : 「天空を議論する輩 (μετεωροσοφιστής)」橋本隆夫訳 (『ギリシア喜劇全集 1』岩波書店, 2008 年所収)。
- (27) アリストファネース『雲』695 行
- (28) G. Vlastos, *op. cit.*, p. 32
- (29) G. Vlastos, *op. cit.*, p. 32 によれば, ソクラテースは 'knowledge' や 'teach' を二重にアイロニカルな仕方で使用しているということになる。そのアイロニーを complex irony と命名している。私たちの見解に彼の complex irony の考えを応用すれば, 次のように言えるだろう。すなわちソクラテースは, 知恵_{po} をもたず知者_{po} ではないが, しかし, 知恵_{ph} をもち知者_{ph} である, また, 彼は若者を教育_{po} せず, また教育_{ph} している。私たちの言う「民衆の意味」(popular sense) は, ヴラストスならば, これを「確立した」(established), 「通常の」(ordinary), 「普通の」(common), 「通俗的な」(vulgar), 「慣習的な」(conventional), 「世間一般の」(current) 意味と呼んでいるものに当たるところだろう。
- (30) しかしそのような「哲学の勧め」が大多数の裁判官や傍聴者に正しく聴きとられたとは思えない。

では、正しく聴きとっていたら、彼らは勧告に従っただろうか？

(31) 田中美知太郎『原典』, 86 頁

(32) 神託事件はこの裁判において初めて明かされたことだとすれば、——田中はそのように考える（田中、前掲書、58 頁）が、——このことは、‘φιλοσοφούντα’ (28E5) と ‘φιλοσοφείν’ (29C9) の意味を考える上に大きく影響するのではないだろうか。なお、‘φιλοσοφῶν’ (29D5) の意味は、‘φιλοσοφούντα’ (28E5) の意味に同じ。神託事件を考慮に入れてそれらの意味を後に検討してみよう。

(33) 本稿 71 頁参照

(34) ソクラテースのこの「フィロソフォス（哲学者）_(ph)」の概念はプラトーンに継承される。プラトーン中期の傑作、『饗宴』が規定する「哲学者」の概念を想起せよ。「[フィロソフェインする者とは] それら両者 [知者と無知者] の中間者です」 ([οἱ φιλοσοφούντες] οἱ μεταξύ τούτων ἀμφοτέρων [= τῶν σοφῶν καὶ τῶν ἀμαθῶν]) (Smp. 204B1-2) .

(35) 齋藤忍随『アポローン—ギリシア文学散歩—』岩波書店、1987 年、256 頁

(36) 田中美知太郎『原典』, 58 頁

(37) ペロポンネーソス戦争開戦以来、アテナーイ北辺のポイオーティアーは「終始アテナーイに敵意を見せていた」（齋藤忍随、前掲書、257 頁）から、デルフォイ参詣は困難であった。したがって、カイレフオンがデルフォイで神託を受けたのは開戦（前 431 年）以前のことであり、ソクラテースがその問答によって「知者」の評判を得たのはさらにそれ以前のことと推定されるからである。

(38) 19E4-20A2:「これらの連中 [ゴルギアースやプロディコス、ヒッピアースなどのソフィステース] は…青年たちに、彼らは、自分の国の人なら…ただで交際することができるのに、そういう人たちとの交際をすてて、自分たちと一緒にするように説きすすめ…」

(39) 田中美知太郎『原典』, 66 頁

(40) アリストファネース『雲』695 行（また、cf. 137 行）では、ソフィスト学校の校長であるソクラテースがストレブシアデースに産婆術を施している。これは産婆術の施術者であることとソフィストであることは矛盾しないということを教えている。

(41) ソクラテースは「世間の人」（田中訳；ἀνθρώπους）と言っている。この人々は「若者」の親の世代と見なして差し支えないだろう。若者をハイティーンと見れば、その親たちは 50 歳くらいの年齢であろうか。そして裁判官の多数は 50 歳を越える年齢であったろう（cf. J. Burnet, *op. cit.*, p. 78）。

(42) アリストファネース『雲』は父と子の「世代間の対立」を描いている。Cf. 松本仁助・岡道男・中務哲郎（編）『ギリシア文学を学ぶ人のために』世界思想社、2000 年、166-7 頁。また、『雲』のソクラテースについての次の記述（田中美知太郎『ソクラテース』48 頁）を参照。「このような教育が、どういふ青少年をつくり上げるかということは、この喜劇の結末において、はっきりと示されている。アテナーイの市民たちは、何となく手におえなくなってきた若い世代を前にして、その害悪がどこから来たかを、何か分かったように思ったかもしれない。」

(43) 佐々木理訳、前掲書、34 頁。佐々木は、この「学者」について「知識学者（結局ソフィストのこと）」と付記している（同書、索引、p.5）。また内山勝利訳、前掲書、19 頁の訳注には次のようにあ

- る。「当時（前四世紀前半）はまだ「哲学 φιλοσοφείν」の語は知的・教育的活動について広義に用いられていたの、ソフィストたちもその中に含まれていると考えられる。」
- (44) ここでリュウディアーの王クロイソスを襲った不幸が想起される。王は神託の「一大帝国」をペルシア帝国と思ひ込み、開戦したために敗北し、火刑に処せられることになった（ヘーロドトス『歴史』1. 53-54）。その点、ソクラテースは慎重であった。Cf. 齋藤忍随『プラトン』岩波新書、55頁、62頁
- (45) 田中は 23E2 を ‘συντεταγμένως καὶ πιθανῶς λέγοντες περὶ ἐμοῦ’ と読み、「組織的かつ説得的に、わたしについて語り」と訳す。このように読むとき、初めは「世間の人」（田中訳）びとが返答に窮し苦し紛れに「中傷」していたものが、党派的・政治的なものに変質し、ついに「アニユトス一派」による「中傷」になったものかと推測される。すぐ後に次の文章が続いている。「メレートスが、わたしに攻撃を加えたのも、リュコーンやアニユトスがそうしたのも、こういうことがもとなのでして、メレートスは、作家を代表し、アニユトスは手工者と政治家のために、リュコーンは弁論家の立場からにくんでいる」（田中訳）。「こういうこと」は、作家、手工者と政治家、弁論家がソクラテースあるいは彼を真似た若い者の吟味を受け、返答に窮したことを指すのではないだろうか。「最初のいつわりの訴えと最初の訴人」（18A8-9）と「後からの訴えと後からの訴人」（18A9-B1）との関連がよく分かるのではないだろうか。
- (46) to say と to mean の区別については、cf. G. Vlastos, *op. cit.*, ch. 1 Socratic irony,
- (47) もちろん訳語を選定しても、ソクラテースがこの言葉でいかなる知的実践を言い表わそうとしていたのかということは、なお考察しなければならない。この考察のためには、彼の「プシューケー」（ψυχή）の説を見なければならない。それは、「精神をできるだけすぐれたものにする」（29E, 30B）に言われる「精神」のことである。
- (48) 山本光雄訳（『ソクラテースの弁明』角川文庫、2007年、初版1954年）と三嶋輝夫訳（三嶋輝夫・田中享英訳『ソクラテースの弁明・クリトン』講談社学術文庫、1999年、初版1998年）は共に、23Dと28Eのいずれにも同じ「哲学する」の訳語を与えている。この「哲学する」は私見では、ph_{po}を意味する（to mean）言葉として受け取らなければならない。因みに、H. Tredennick & H. Tarrant の訳は ‘any seeker after wisdom’ —— ‘leading the philosophic life’ (Plato, *The Last Days of Socrates*, Penguin Books, 1993), また M. Fuhrmann の訳は、‘alle, die Philosophie treiben’ —— ‘als Philosoph leben’ (Platon, *Apologie des Sokrates*, Ph. Reclam jun., 2004) となっている。前者は田中訳の、後者は山本訳と三嶋訳の線に、それぞれ沿うものと見ることもできるかも知れない。しかし、Fuhrmann 訳については、私が抱える問題はまったく生じて来ないのかも知れない。‘Philosophie’ も ‘Philosoph’ もたんにギリシア語原語 ‘φιλοσοφείν’ を音訳しているに過ぎないからである。
- (49) 田中美知太郎『原典』、86頁
- (50) 「求知者」は、田中美知太郎訳『テアイテトス』岩波文庫、2003年に做ったものであって、そこでは ‘τοὺς...διατρέβοντας ἐν φιλοσοφίᾳ’ (173C7-8) には「智の探求に従事している者」「求智者」の、

‘φιλόσοφον’ (175E2) には「好学求智の士」の訳語が与えられている。

(51) 当該箇所の中訳は次の通りである。「自分はこれよりも小さな訴訟事件の当事者であったときにも、多くの涙を流し、出来るだけ多くの同情を勝ち得るために、自分の子供を登場させ、またほかに家人や友人にも、多数出してもらって、裁判する諸君に哀訴嘆願したのに、わたしはと見れば、そういうことを一つもしようとしないではないか、しかも非常に危険な立場にいる——と思われる——のに、そんなことではいけない。」ちなみに ‘τούς δικαστάς’ の訳語は久保勉訳 (岩波文庫, 1993 年) は「法官」、山本訳と三嶋訳はともに「裁判官」となっている。

(52) Cf. G. Vlastos, *op. cit.*, ch. 1

(53) J. Burnet, *op. cit.*, p.68.

(54) 田中は後出 35C1 : ‘τοῦ δικαστοῦ’ に対して「裁判する者」と訳し、これに直続する同意味の ‘δικαστής’ を「裁判官」と訳している。35B9-C4 : (田中訳)「裁判する者に…頼んで無罪にしてもらう [の] は正しいことではない…なぜなら、裁判官という者は…正邪を判別するために [そこへ坐っている]’ (‘οὐδὲ δίκαιόν μοι δοκεῖ εἶναι ... τοῦ δικαστοῦ ... δεόμενον ἀποφεύγειν κάθηται [γάρ] ὁ δικαστής ... ἐπὶ τῷ κρίνειν ταῦτα [= τὰ δίκαια]’) 田中が先の ‘τοῦ δικαστοῦ’ を「裁判官」ではなく「裁判する者」と訳したのは、文章化粧上の配慮によるものかと推量される。35B9-C4 と同趣旨のことをソクラテースは、すでに弁明の冒頭 (=序言 (προοίμιον)) 締めくくり (18A5) でも述べていた。田中訳:「そうする [=わたしの言うことが正しいか否かということだけに注意を向けて、それをよく考えてみる] のが、裁判をする人の立派さというものであり、…」(‘δικαστοῦ μὲν γὰρ αὐτῆ [= τοῦτο σκοπεῖν καὶ τοῦτῳ τὸν νοῦν προσέχειν, εἰ δίκαια λέγω ἢ μὴ] ἀρετή, ...’) それ故、ここで「裁判する人」と訳したのも同じ配慮が働いていることかと思われるのである。

(55) ソクラテースのメレートスへの尋問には次のようなやり取りがある。「それは、ソクラテース、ここにいる裁判官たち (οὗτοι οἱ δικασταί) だ」「…この人たち (οἶδε) が、青年を教育するのであり、彼らを善いほうへと導いているのだというのかね」「おおいにそのとおりだ。」「この人たち」は ‘οἶδε [οἱ δικασταί]’ を翻訳したものだろう。「法律が青年たちをより善くすることを、法律を最初に知る者が裁判官である」というメレートスの返答を確認しているものであり、やり取りの焦点は ‘δικασταί’ であるか否かにある。‘οὗτοι’ が ‘οἶδε’ に変わっているのは、ソクラテース、メレートス、裁判官ら三者の相対的位置関係に応じた、いわば機械的変更であるに過ぎない (cf. 田中, 『原典』, 72 頁)。たとえソクラテースとしては ‘οἶδε οἱ δικασταί’ とは言いたくなかったとしても、‘οἶδε’ が公共の場において発せられた限り、‘οἶδε’ の後には ‘δικασταί’ が省略されている、省略は同一語の繰り返しを避けるためのものとして、一般に受け取られ、したがってメレートスもまたそのように聞いているのである。その後のやり取り、‘οἶδε οἱ ἀκροαταὶ βελτίους ποιούσιν ἢ οὐ ; Καὶ οὗτοι.’ と比較せよ。なお、メレートスの言葉、‘ὧ ἄνδρες δικασταί’ (26D6. 田中訳:「裁判官の諸君」) について、cf. 田中, 前掲書, 76 頁:「ソクラテースはこれまで ‘アテナイ人諸君’ の呼称のみを用いて、このような呼び掛けをしないのと比較して、興味ある態度と見ることができる。」また、久保訳, 山本訳, 三嶋訳を参照せよ。それぞれ、‘οἶδε’ を「この人達」、「この人々」、「この方たち」と訳している。

(56) Cf. 本稿 76 および前注 28

(57) 以下に展開する考察は、私の小論、「知を愛し求めながら生きていくこと」(『渡邊二郎著作集 第7巻 ドイツ古典哲学 I』月報 7, 筑摩書房, 2011年, 5-7頁)への自己批判となるものである。言葉は公共的であり、ソクラテースも「 ph_{po} 」を語らざるをえないという点への留意が、そこでは欠落していた。

(58) 私は基盤教育において『弁明』を読む(平成 22-24年), また学部教育において『弁明』から哲学の成立を考える(平成 23年), 『弁明』再考—哲学成立の風景を眺める(平成 24年)の講義を行なった。哲学がソクラテースにおいて成立してくる有様を彼の弁明のうちに探るというのが、これらの講義で私が意図したことであった。しかしこの意図を実現するには田中訳『弁明』は役立つのではないかと、という感想を私は持つ。

(59) 田中美知太郎, 『原典』, 86頁

(60) J. Burnet, *op. cit.*, pp.87-8.

(61) 出隆訳, アリストテレス『形而上学 上』岩波文庫, 1969年, 32-3頁

(62) 本稿 71頁を見よ。

(63) 前注 50を見よ。

(64) Cf. 田中, 『原典』, 89頁, また, Burnet, *op. cit.*, p. 123

(65) Cf. 前注 21

(66) Arist., *N. E.*, I. v., 1095b14 ff.

(67) *Thuc.*, II. 40

Ti prāttei Sōkratēs, hotan ‘philosophēi’ ?

— Reading M. Tanaka’s translation of Plato’s *Apology* —

Hideaki Furukawa

Philosophy (in the narrower or today’s sense) was born between Socrates and Plato, or in Plato’s relation to Socrates (S. Kato, *History of Greek Philosophy*). The god at *Delphoi* (*Apollōn*) said that no one was wiser than Socrates. However, Socrates himself says that he is not wise at all. The god’s and his own testimonies contradict plainly with one another, for the solution of which he began to examine (*exetazein*) himself and others, and this occupation (*prāgma*) he calls ‘*philosophēin*’ (S. Kato, *op. cit.*). So by reading Plato’s *Apologiā Sōkratous* we may hope to be present at the scene where philosophy in narrower sense (= ph_{ph}) is being formed.

In *Apology* there appear four tokens of ‘*philosophēin*’, the first (23D5) of which means philosophy in wider sense or popular sense (= ph_{po}), *i. e.* sciences in general, and the second (28E5) of which means ph_{ph}, a special science distinguished from positive sciences on one hand and from logic and mathematics on the other hand. M. Tanaka provides these readings of ‘*philosophountōn*’ (23D5) and of ‘*philosophounta*’ (28E5) too. He translates the former into ‘*gakumon wo shiteiru*’ and the latter into ‘*chi wo aishimotomenagara*’. In his eyes philosophy is in the very process of becoming.

While Tanaka correctly grasps the rise of philosophy in thoughts, he fails to describe this in words. For the same reason why his translation succeeds in teaching us that philosophy is becoming in Socrates, it fails to translate the dialogue (though imagined) between Socrates and the *dikastai* (28E4-6, 29C7-D1, D2-4). By ‘*philosophēin*’ Socrates indeed meant ‘*chi no aikyū*’ but did not say it. Tanaka confuses meaning with saying, and for this reason he failed to make appear vividly in Japanese philosophy as it is becoming. If Socrates truly dialogues with the *dikastai* (though in his imagination), he must say to them ‘ph_{po}’, not ‘ph_{ph}’ (‘*chi no aikyū*’).

Socrates naturally uses the old ‘*philosophēin*’, which is the word in public use, ‘ph_{po}’ and expresses his own new meaning, ‘ph_{ph}’ through his looks and tones. We too have to translate ‘*philosophēin*’ (28E5) into the Japanese word, ‘*kyūchisuru*’ or Tanaka’s ‘*gakumonsuru*’ which are to stand for ph_{po}. In addition, as we are not present at his trial, we should understand Socrates’ philosophy (= ph_{ph}) through reading the contexts, among which is included ‘*tēs psychēs epimeleisthai*’ *etc.* (29E1-2). That Plato’s *Apology* is not a treatise but a drama is never to be forgotten.